ラジオ放送

＜平成29年10月～12月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.421

もくじ ～*contents*

＜昔むかし＞

☞ 金光教的むかしばなし

●癇癪持ちの弥右衛門　*page 1*

●吾平と逃げるお金　*page 4*

●みよの話　*page 8*

●峠の飯屋　*page 11*

＜信者さんのおはなし＞

☞ 信徒の体験談です。

●みかん畑で柏手(かしわで)打って　*page 15*

●神様も一緒に　*page 19*

●鎧(よろい)を脱ぎ捨てて　*page 23*

●ありがたいをつくるもの　*page 27*

●二度とあんなことは言わない　*page 31*

●無神論者の夫が…　*page 35*

●神様がつけてくださった道　*page 39*

●笑顔のわけ　*page 43*

＜先生のおはなし＞

●真夜中の電話　*page 47*

《昔むかし》

「癇癪持ちの弥右衛門」

昔むかし、ある町に弥右衛門（やえもん）という呉服物の商いをする男がおりました。奇麗な着物を扱う商売なのに、弥右衛門はひどい癇癪（かんしゃく）持ちで、いつも家の者たちには怒鳴り散らします。ですから働いている奉公人が一人居りましたが、今まで一年と持ったためしがありません。次から次と辞めていきますので、それも弥右衛門の癇癪の種です。

弥右衛門にはおかみさんと五歳の佐吉という子どもが居りました。この佐吉は体が弱く、食も進まずお腹を壊してばかりおりましたので、顔色も悪くヒョロヒョロし、またそれが弥右衛門の癇癪の種で、おかみさんに、「おまえの育て方が悪い」と八つ当たりする始末です。

ある日、商いが上手く行かず、プリプリしながら道を歩いておりますと、幼なじみの善造（ぜんぞう）に出会いました。

「弥右衛門よ、その顔を見ると、また癇癪を起こしているな」

弥右衛門が、「それの何が悪い！」と怒鳴りますと、「お前は癇癪さえ起こさなければいい奴なのになあ」と善造はしみじみと言います。

「じゃあ腹が立った時にはどうする？」

弥右衛門が尋ねますと、善造は、「俺の信心している神様の教えは、『腹が立った時にはすぐに怒らずに一度よく考える。これは怒らんならんものか、怒らんでもいいものか。そして本

当に怒らんならん時には怒り、大して怒らんでもいい時は怒ることはいらん』。まあこういうことだ」。

「ふーん、なるほどなあ」と弥右衛門は思いました。

次の日の朝です。弥右衛門は目覚めると床(とこ)の中でたばこを一服する癖があります。おかみさんがたばこ盆に火を入れて枕元へ持って来たのですが、弥右衛門はウトウトまた一寝入りしてしまいました。

さて、目が覚めてたばこを吸おうとすると、たばこ盆の火が灰になっておりました。

「けしからん、何だこれは！　途中で消えるような火を入れおって」と、いつものように怒鳴ろうとしましたが、ふと善造の言ったことを思い出しました。

「わしが一眠りした間に火も眠ってしまったのだ。これは怒らんでも済むことだ」と思い、おかみさんを呼んで、「えらい済まんが、これに火を入れてくれ」と頼みますと。

おかみさんは、「それは気が付きませんで、悪うございました」と、機嫌良く火を入れ変えてくれました。

朝ご飯を済ませて、商いに出る身支度をしている時でした。足袋を履こうとすると、その足袋がどちらも右足の方ばかりです。弥右衛門はグッと癇(かん)に障り、いつもなら足袋を投げ付けて怒鳴るところを、「おっと待った、ここだ、ここだ」と思い直し、「おい、左足の足袋を出しておくれ」と、おかみさんに言いますと、「気

が付かずに済みません。悪うございました」。
そして、表まで弥右衛門を見送りに出て来ます。弥右衛門はいつになく良い気分で出掛けました。
商いの方も客の話を良く聞いて事を進めるようにしましたので、とんとん拍子に話が進み、弥右衛門は良い気分で帰って来ると、おかみさんと、そして佐吉も、「お帰り」と言って出迎えに出て来ます。
それからというもの弥右衛門は、「今まで怒らなくてもいいことを怒ったりして、何とアホらしいことをしていたのだろう」。
そして奉公人も居着くようになり、商売は繁盛しました。商いに夢中のあまり、すっかり子どもの佐吉の病気のことを忘れておりましたが、ある時、ふと表を見ますと、佐吉が走り回っているではありませんか。ビックリした弥右衛門は、「おい、佐吉は最近どうしたのだ？」とおかみさんに聞きますと。
「近頃は良く食べて、お腹も壊さずに、元気になりました」
「へえー、これは不思議なことだな」と思いつつ、ある日、善造にそのことを話しますと、「それはお前の態度が改まったからだろう。これでお前の家は、めでたしめでたしではないか」。

おしまい。

《昔むかし》

「吾平と逃げるお金」

昔むかし、ある海沿いの村に吾平という漁師がおりました。吾平はそんなに働き者ではありません。ですからいつも貧乏で、おかみさんとけんかが絶えませんでした。

ある日、吾平が海辺をブラブラ歩いておりますと、庄屋さんとばったり出会いました。

「おう吾平よ、昼間っから酒を飲んでるのかい。暮らしに困らないのは結構結構」

すると吾平は、「そうじゃないんで、銭があったらもっと酒が飲めるのに、懐が寂しいもんで、これでも我慢してるんですよ」と言う。

「ここ数日良い天気で、漁も魚がたくさん捕れたと言うのに、どうして懐が寂しいんだね？」と庄屋さんが尋ねますと。

「俺は毎日漁に行ってないんで」

「へえー!?」

庄屋さんはビックリして、「どこか体の具合でも悪いのかね」と心配して尋ねますと。

「悪くはないんですがね、夜中に起きて漁に行くのが面倒臭いだけで、まあ金が無くなったら漁には行きますよ。ところで、何かどっさり金がもうかるって話はありませんかねえ？」

「吾平よ、まあちょっと座れ」。あきれ顔の庄屋さんは言いました。

「金は『おあし』と言うくらいで、足があるんだ。広い世間を歩き回って働いている。だからお前のように何もせず、ブラブラしていると、

『お先に失礼』と言ってさっさと通り過ぎてしまうんだよ」
「へえー、それではどうしたら『おあし』が、俺の所で留まってくれるんでしょうかねえ？」
「それはお前が金に好かれるようにすれば、金がお前を追い掛けて来る。ところでお前はおかみさんに好かれておいでかい？」
「とんでもない、働かないと言ってけんかばかりで、好かれてなんか…」
庄屋さんはさもありなんとうなずきながら、「大体、金に好かれない人は、おかみさんにも好かれないものだ」と言って、おかしそうに笑うのでした。
「どうしてです？」と吾平が尋ねますと、
「それはお前が金の言うことも、おかみさんの言うことにも耳を貸さないからだ」
「へえー、うちのかかあのことは分かりますがね、金がものを言いますかね？」
吾平が不思議そうに尋ねますと、庄屋さんは、
「金は生きているよ」
「そんな、聞いたこともない」
思わず吾平が言いますと。
「金は利息を生む、死んだものが子を生むものか。それにお前がついさっき飲んだ酒代も、今は酒屋の手から誰かの手に渡って自由に動いているだろう。そしてなあ、金にも好き嫌いがある」
「何です？　金の好き嫌いって？」
「第一に怠け者が嫌いだ」
庄屋さんがジロリと吾平を見たので、吾平は

思わず首をすくめました。
「第二にぜいたくが嫌いだ」
「俺はぜいたくなんてしてませんよ。したくても出来っこない」
すると庄屋さんは、「ぜいたくとは無駄なことをする人を言うのだよ」。
「ムダ？」
五平はまだ良く分からないという顔付きで尋ねました。
「例えばお前はさっき、『銭があったら、もっと酒が飲めるのに』と言った。あれはぜいたくだ」
「へえーっ、ぜいたく？」
「酒にも適量ってものがある」
それでも吾平は首を傾げます。
すると庄屋さんは、「金も同じだよ。わしらの体の中を流れている血に例えてみるとよく分かるだろう。血が無くては一日も生きてはいけない。だからと言って、血が多すぎても、これまた困る。元気なためには、適量な血が体を巡るってことだ。吾平よ、これで『金の話』は分かったかい？」
「へえ」と答えたものの、吾平はあまり良く分からず、考え考え家に帰りました。
さて、三カ月ほど経ったころ、庄屋さんがまた海辺を歩いておりますと、「庄屋さーん」と呼ぶ声がして、息を切らしながら吾平が追い掛けて来ました。そうしてこう言いました。
「庄屋さんの言ったように、確かに金は生きてますね。俺んとこにも、ちょいちょい訪ねて

来るようになりましたよ」

おしまい。

《昔むかし》

「みよの話」

昔むかし、ある山あいの村に、信心深い木こりの若い夫婦がおりました。女の子が生まれ、「みよ」と名付け、可愛がっていました。

それから数年後に男の子を授かり、「小太郎（こたろう）」と名付けました。みんなは幸せな日々を過ごしておりました。父親はますます仕事に励み、母親は小太郎を育てます。みよも弟のそばから離れず、母親が小太郎のおむつを替えている時にものぞき込んでおりますと母親が、「良いうんちが出て良かったねえ、気持ち良かっただろうね」と小太郎に語り掛けます。

「いつもそう言うのね、どうして？」とみよが聞きますと、「あのね、うんちが出ないでお腹がふくれあがったら困るでしょう。みよだって、良いうんちの出るお腹でないと、美味しい物が食べられないでしょ？」

みよはしばらく考えておりました。

「おっ母さん、本当にその通りね」

すると母親は、「だから、おっ母さんはいつも小太郎のおむつを替える時、『ああ今日も元気で良いうんちやおしっこが出て、神様ありがとうございます』と、お礼を言っているのよ」。

母親が小太郎を寝かし付けてふと見ますと、汚れたおむつが見当たりません。すると、みよが神棚にさっきのおむつを乗せて、手を合わせているではありませんか。

「みよ!? おむつを神棚にお供えしてはいけ

ないよ」。母親は、困惑するやら、感心するやら苦笑いを浮かべました。

その数日後です。夕方、表の戸がバタバタと開きました。木こり仲間が父親を負ぶっています。

「あんた、どうしたの？」

驚いている母親に木こりの親方は、「急に木が倒れてきて、逃げ損なってけがをしてしまったんだ」。

「お父っつぁん、大丈夫？」

「今、医者に診てもらったが、半年位で治るだろうとのことだ。そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

それでも母親とみよは心配です。みよは母親の手伝いを一生懸命にしました。しかし日が経つにつれて、母親は蓄えてきたお金が段々少なくなっていくのが気掛かりで、ある時みよを呼んで言いました。

「おっ母さんは働きに行くことにした。昼間留守の間、みよがお父っつあんと小太郎の世話が出来るかねえ？」

みよは、「はい」と返事をしました。そしてそれから前にも増して家の手伝いをしました。

ある嵐の夜のことです。戸をホトホトと叩く音がしました。開けてみますと、「私は旅の商人（あきんど）で今、峠を下りて来ましたが、嵐があまりにも激しいので、何とか一晩泊めて下さいませんか」と言うのです。母親はその様子がいかにも気の毒でしたので、「狭い家ですが、どうぞお入り下さい」と家に招き入れました。

旅人は大層喜んで、何度もお礼を言いました。
翌朝は、嵐が去ってお天道さまがキラキラと輝いております。みんなで貧しい食事をした後、旅人はお礼を言って出発しましたが、その時、荷物の中からお人形を出して、みよに、「世話になったね」と言って手渡してくれました。
みよは、こんな奇麗なお人形を見たことがありません。「うれしいなあ、うれしいなあ」としばらくお人形を抱きしめておりましたが、ふと気付いて旅人の後を、「おじさん、おじさん」と呼びながら追い掛けました。旅人は立ち止まって、「どうしたんだね？」と聞きますと、
「お願いがあります。このお人形を、弟のおむつになるような布と取り換えて下さいな。弟のおむつは私のお下がりで、今は布が傷んで困っているのです」
「そうかそうか、それじゃあ、これを使いなさい」。旅人は荷物の中から布地を出しました。
「こんなに立派な布でなくても…」
「いいんだよ、みよちゃんは本当に偉いね。そうだ、お父っつぁんのけがの痛む所に貼る薬もあげようかね」。そう言って、みよの頭をなでて山道を下りて行きました。
みよは、いつまでも、その後姿を見送っていました。
「家（うち）に帰ったら、神棚にこの布と薬もお供えしよう、神様ありがとう」

おしまい。

《昔むかし》

「峠の飯屋」

昔むかし、佐助と言う旅の商人(あきんど)が、小高い峠にたどり着きますと、良い天気で真下には海がキラキラと輝いております。

「さて腹も空いたし、そこらで昼飯でも食おうか。おっ、新しい飯屋が店を開いた、試しに入って見よう」

すると、「いらっしゃいませ」と言った中年のおかみさんがあまりに美しい人なので、佐助はビックリしました。注文した品が運ばれてきますと、そのうまいこと、うまいこと。しかし店はガラガラです。

「それにしても、あのおかみさんはどこかで見掛けたことがあるぞ」と佐助は思い、「うーん」と考えた末におかみさんに聞きました。「もしかして、おかみさんは峠一つ向こうの山田村のお生まれではありませんか？」おかみさんは、「はい」と戸惑ったような顔で答えました。

「やっぱりそうでしたか、もしや山田村のお大尽のお嬢様、きぬ様ではありませんか？」

「どうしてご存知で？」

「やっぱりそうだ、きぬ様が庄屋様の息子さんに嫁がれる時の美しいお姿は、まるで天女のようで、私ら若者はみんなぞろぞろと見に行きましたよ」

「昔のことです」

「庄屋様の所に嫁がれたのに、どうしてまた？」佐助が問いますと、おかみさんはためら

いつつも言いました。「数年前に村方騒動が起こりまして」

「どうして？」と佐助が問いますと、「舅（しゅうと）様の下で働いていた村役人が、お金を使い込み、それが発覚しますと、舅様はあらぬ疑いを掛けられて、庄屋をお辞めになったのでございます。更には眠れぬ日々を送り、病となり、そして一年前にお亡くなりになりました」。

「何とお気の毒なことで…」

「本当にお優しいお方でしたので、亡くなられる直前まで私たち家族のことを心配して下さっていました」

「おつらいことでしたな」。佐助が言いますと、「ええ、本当に。けれども、いつまでもつらい気持ちでいては亡くなられた舅様も喜ばれないと思い、旦那様、姑様、皆で景色の良い所を探しまして、この店を始めたのでございます」。

「そうだったんですか、こんなにうまい飯ですから、きぬ様は昔から料理がお好きだったんですね」

「いえいえ、実は、嫁ぐ前は、私は料理一つ出来ませんでした」

「本当ですか？」

「庄屋に嫁いでからのことでございます。初めは、お米をといだらこぼしてしまう、また包丁で自分の手を切る、お芋の皮一つ満足にむけたことはなく、厚くむきすぎては、『もったいない』と姑様に叱られてばかりでした」

「それは大変でしたね」

「こんな私でも、姑様は何度も何度も辛抱強く教えて下さいました。食べ物は、お日様の光や雨、土の働き、つまり神様の恵みの中で育った物だから、葉っぱ一枚でも大切にするように、また包丁やまな板にも感謝するように、と教えられたのです」

「ははあ…」

「姑様の『すべてに感謝して』という教えのお陰です。そのようにして時が経ちますと、私は料理の楽しさがつくづくと分かるようになり、だんだんと料理もおいしいと言ってもらえるようになったのです」

「なるほど、感謝の詰まった味だから、こんなにおいしいんですね」と佐助はしみじみと言いました。「けれども、お客様があまりに少なくて…」とおかみさんは顔を曇らせます。

「それはこの店の飯がうまいってことを知らないからですよ。大丈夫、先程きぬ様がおっしゃっていた感謝の心を変わらずに大切にしていれば、必ず繁盛しますよ。私は小間物を扱う旅の商人なので、知り合いがたくさん居ります。この店のことを皆に知らせておきましょう」

「それはありがとうございます、よろしくお願い申し上げます」

おかみさんが深々と頭を下げますと、

「おっと、おきぬ様、お大尽の娘さんではなく、今は飯屋のおかみさんですよ。ざっくばらんな言葉を使った方が、客が入りやすい」

そう言った佐助の笑顔が、舅の笑った顔にとてもそっくりで、おかみさんも笑ってうなずき

ました。

その後、お店は佐助の言った通り、おいしいご飯を出す店として、大層繁盛したということです。

おしまい。

《信者さんのおはなし》

「みかん畑で柏手打って」

愛媛県の南西部にある西予市三瓶町。リアス式海岸の波穏やかな三瓶湾は、名産のアジをはじめ、様々な海産物に恵まれています。また、みかんなどかんきつ類の栽培も盛んで、海の幸、山の幸共に豊かなところです。

この三瓶町にある金光教三瓶教会にお参りしている清水栄一さんは、昭和八年生まれの八十三歳。十人兄弟の三男として兼業農家の家に生まれました。稲作をはじめ麦やさつまいもを中心に、朝早くから日暮れまで一生懸命働く両親の姿が記憶に残っています。

お母さんが熱心に教会に参拝しており、清水さんら子どもたちは、小さいころからお母さんに連れられ、一緒にお参りしていました。その様子は、まるで親ガモに連なる小ガモたちのように、お母さんのあとに子どもたちが続き、三瓶の町を教会へと歩いたそうです。信心に熱心なお母さんの姿を思い出しながら、清水さんはこう話します。

「母はいつでも、『作物を育んで下さる天地の神様のお働き、ありがとうございます』とお祈りしてましたな。また、神様に向かってお祈りする内容が、私たち子どもらにしっかりと聞こえるように、いつも大きく声に出して拝んでましたよ。何でもかんでも祈りながらさせてもろうてましたな。恵みを下さる田畑の土地を『お土地』と呼んで、毎日、田畑に手を合わせる母

の後ろ姿を思い出しますな」

清水さんは学校を卒業し、家の農業を手伝い、農作業がない時期には、材木の伐採などの仕事に当たりました。お父さんと一緒に、伐採で山に入った時のこと。お昼のお弁当の際に「頂きます」と手を合わせる清水さん親子を見た職人さんから、「あんたら親子そろって、お弁当にそないありがたそうに手を合わせてから食べて。かわいらしいなあ」と言われたことも良い思い出です。

こうした生活を送っていたある時、教会の先生がお話されたことが心に響きました。

「この世の中で、人間の力だけで出来ることは一つもない。みな神様にさせて頂いて出来ている」という内容でした。いつも田畑を拝むお母さんの姿も思い出しながら、「確かにそうだ。自分の力だけで出来ることは何もない。農業も他の仕事も、生活一切が、神様のお働きや様々なお世話を頂いて出来ていること。お世話になってのこの命。これからは、いつもお礼を申し上げることを忘れないようにしよう」と強く心に刻んだのでした。

二十九歳の時に結婚。四人の子どもにも恵まれ、忙しくも幸せな生活を送っていましたが、清水さんが五十四歳の時、奥さんが脳梗塞（のうこうそく）で倒れ、亡くなりました。五十二歳でした。突然のことで、家族一同悲しみの中にありましたが、教会の先生やお母さんから、「いつでもまずお礼を」と教えられていた清水さんは、「人の命のことは、人間には分からない。まずはここま

での命のお礼をさせて頂こう」と思い、教会に参拝しました。結婚して清水家に来てくれての二十五年間、妻として、母として、一生懸命務めてくれたことを、神様にお礼申し上げたのでした。

その後、四人の子どもたちは育ち、孫九人、ひ孫三人が生まれました。日々、子どもたちの成長をありがたく思います。

今、清水さんの生活は、朝六時の教会参拝から始まります。昨日一日のお礼と、今日一日取り組むことを神様に申し上げ、教会の先生から教えの話を聞きます。

その後、向かうのは、みかん畑です。五十年前、お父さんが始めた畑を受け継ぎ、一人でみかん作りに専念しています。

「農作物は、天地自然の働き、影響をそのまま受けるんです」と清水さんは言います。太陽の光、雨、風、そういった気候条件によって、育ち方が変わってきます。風が強すぎると枝が折れたり、みかんとみかんがこすれてすり傷が出来る、雨が降らなければ成長に影響が出る、多すぎても病気が出たりする。ちょうど良いお働きが大事なのです。

春から剪定（せんてい）作業、肥料を施したり、余分な物を摘み取ったり、秋ごろからは病気の対策、その後、収穫、選別、出荷。冬の間も虫の対策など、一年中やるべきことがあります。なにぶん、一人での作業。効率的に出来るように工夫し、出来る限りの努力をしながら、最後は神様にお願いし、お任せしていく心持ちです。

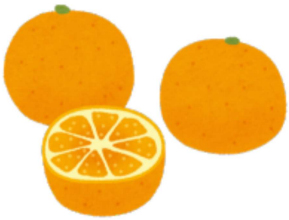
「何でも自分で作っとるように思うけれども、全部天地のお働きで育てられて出来上がるものですな。作物をお作りになるのは神様。神様にお任せし、私たちはそのお手伝いをさせてもらっとる。そのことをいつも忘れないようにせんといけませんなあ」と話す清水さん。

ある時、みかん畑で夜遅くまでの作業を終え、「はあ、終わったあ」とふと見上げると、そこには大きな満月が。「はあ何とも奇麗なお月様じゃなあ。今日も一日、無事に終えることが出来ました。ああ、ありがたい、ありがたい」と、みかん畑と満月を拝む清水さんの心に、ふと一首浮かんできました。

一日の　仕事を終えし　月の出の
畑(はた)に向(むか)いて　柏手(かしわで)を打つ
一日の　仕事を終えし　月の出の
畑に向いて　柏手を打つ

天地の神様へ、お礼の心が込もった柏手の音が、満月の夜、みかん畑に響いたのでした。

両親から信心とみかん畑を受け継いで、いつも実直に、お礼の心で、今日もまた、みかん畑へ向かいます。



《信者さんのおはなし》

「神様も一緒に」

三重県の金光教伊勢教会にお参りされる世古口(せこぐち)禮子さんは、八月十五日、終戦記念日の正午に生まれたという七十二歳の女性です。

人は誰でも苦しみや災いから逃げたくなるように思いますが、世古口さんの場合は、神様を信じる揺るぎない心で、苦難を乗り越えてこられました。もちろん最初は不安な気持ちがありましたが、病気になったことが切っ掛けで教会の先生と一緒にお祈りする機会も増え、信心が深まっていきました。

最初の異変は七十歳を迎えたころでした。突然三リットルの腹水がたまり、食事も出来ず、つらい思いをしました。原因が分からず、泌尿器科と婦人科の病院を転々としたそうです。お医者さんにとって手の打ちようがなかったのか、もう来ないで下さいと言わんばかりに、「あなたは私の患者じゃありません。関係ないですから」と言われた時には、とても傷付きました。

患者というのは不安な気持ちがあるので、お医者さんの言葉には敏感です。世古口さんはその時のことを思い出しながら、目をつぶって言いました。

「年末から年明けは、本当につらかったです。お腹に水がたまって食事も頂けないんです。でも、大みそかになって、伊勢市内で良い先生に出会え、こう言ってもらったんです。『このつらい姿で、お正月をまたぐとは、どういうこと

なの？ 私が紹介状を書きますね。病院を訪ねた時、すぐ診るように電話しておきますから』と言って処置をして下さり、お話もして下さいました。私にとって、迎え入れて下さるお医者さんを授かったことは、とてもうれしいことでした」

世古口さんは、くわしく検査をしてもらい、お医者さんから「原発性腹膜がん」であると告知されました。腹膜の中にがんが入り込んでいて手術は出来ない。抗がん剤治療しかないということでした。でも、検査をするまでずっと原因が分からない不安があったので、病名を聞いたことで、むしろ、「見付かって良かった。ありがとうございます」という気持ちになったそうです。

抗がん剤治療は、二十八日周期で六回受けました。二週間くらい経つと、副作用で髪の毛が抜け始めました。そのことを息子さんに伝えると、こう言われました。「病気が治ったらまた生えてくるでしょう。僕の場合は、そうはならないけど…」。息子さんは元々髪の毛が多くないそうで、それを聞いた時、クスッと笑いが出ました。

副作用で眉毛やまつ毛も抜けましたが、お姉さんからは、「それだけ全身にお薬が行き渡っているということだよね」と言われて、「ああ、その通りだ。神様が全身に働いて下さっているんだ」と思えるようになりました。

世古口さんは言います。「抗がん剤治療と聞くと不安になりますが、心配したり、あれこれ

思うよりも、神様も一緒に治療して下さる。お縋りして、お任せしようという気持ちになりました」

二度目の治療が始まりました。ある朝、激しい痛みで目が覚めると、お腹全体を鳥のくちばしで食いちぎられているように痛みました。世古口さんは体を大の字にして無我夢中でお願いしました。「どうぞ金光様、この激痛を通して、私にがんと向き合わせて下さい。病気を乗り越える力を授けて下さい」。何度も繰り返しお願いしました。

時計の針を見ると、朝の五時から二時間経っていましたが、その間、十分くらいに感じたそうです。「この痛みがあったから、真剣に向き合うことが出来ました」と、世古口さんは話されます。そこには苦しみから逃げるのでなく、神様にお縋りしながら試練を受け止め、立ち向かっていく姿がありました。

その後の血液検査で数値が随分良くなりました。残り四回の治療も無事に済みましたが、世古口さんは、教会の先生の言葉に元気を頂いていました。教会の先生は、「この病気はマラソンと同じようなものです。途中には色んな格闘がある。ある時には、もう自分の心が折れそうになることがあるかもしれない。そういう時は、どうか神様頑張らせて下さいとお願いをして下さい。あなたは一人じゃないですよ。私はずっとあなたの病気がおかげ頂けるように、毎日祈ってますから！」と世古口さんを励ましてくれました。

しかし、その後、病気が再発し、昨年三月から半年間、抗がん剤治療を受けました。その時も、教会の先生は言いました。「例えばですが、大きな借金をしたとして、一度に返すのは大変でしょう。それと同じで、この病気も、二回に分けて治療を受けさせて頂いているのでしょう。一度目の抗がん剤治療では、お腹にたまった水を抜いて頂きましたからね」。教会の先生の言葉を聞いて、世古口さんはまた受け止める思いになれました。

こうして二度目の抗がん剤治療を終えて、一年以上が経ちました。

現在の世古口さんは、とても体調がいいそうです。数値もずっと安定しています。世古口さんはこう言います。

「神様にお縋りしていたら大丈夫。心配が出たら、あれこれ考えずに教会に足を運んで、先生に話を聞いてもらいます。私は病気をしてから、心をさらけ出せるようになりました」

信仰の力は、こうも人を強くさせるのでしょうか。前を向いて話す世古口さんの目は、神様に生かされている喜びと希望で輝いていました。

《信者さんのおはなし》

「鎧を脱ぎ捨てて」

信州は長野県。白樺湖や霧ヶ峰など美しい風景が近くに広がる高原で、ペンション「白樺倶楽部」を経営しているのが、本日の主人公、稲池憲一さんです。金光教諏訪教会にお参りする、六十五歳のダンディーな男性です。

「食べる」という漢字一文字を分解すると、「人が良くなる」と書きます。「ご馳走」という言葉は、馬が走るように食材を求め集めて料理でもてなすことです。稲池さんは、そんな言葉の通り、地元の食材を使って、訪れたゲストの人たちを歓迎します。

でも、このペンション、他とは少し違うんです。それはペットも家族の一員として迎えてくれるということ。ペットと一緒に食事をしたり、ペットと一緒に宿泊ルームで過ごせたり出来るのです。ペット連れの方をもてなすペンションを営むこと、それが幼い頃から大のワンちゃん好きだった稲池さんの夢でした。

その夢が実現したのが、今から十五年前の五十歳の頃。勤めていた東京の会社を辞め、いよいよ長野県でペンションを営み始めたのです。憧れのペンション経営でしたが、いざ始めてみると、資金繰りや大学・高校に通う子ども三人の学費の支払いに追われ、台所はみるみる火の車。ついには、クレジットの借金にも手を出し、働けど働けど返済に追われる毎日となってしまったのです。大学に通う娘が友人から、「いつ

も同じコートを着ているね」と言われたり、息子が学費の滞納で先生に呼び付けられたり、親としていたたまれない気持ちになりました。

そんな時に金光教のご信心によって救われた、と展開しそうなところなのですが、実は稲池さん、金光教の教会には随分と長い間お参りしていなかったのです。小さい頃には、両親や祖母に連れられ、大阪や福岡にある金光教の教会にお参りしていたそうですが、何か縛られるという感じがしたり、先生に見透かされているという気がしたりして、教会に行くのが嫌になり、以来ずっと金光教とは縁が切れたままだったのです。

ですから、借金返済に追われる大変な状況の中でも、自ら神様に縋るということではなく、その時は法律の専門家にアドバイスをもらって、少しずつ経済状態は改善されていきました。

その稲池さんが金光教に再びご縁を頂いたのは、今から五年前のことでした。父親が亡くなって二十五年の御霊（みたま）祭りを、ぜひ金光教の教会でやってもらいたいという母親の願いがきっかけでした。

長野県内にある金光教の教会を探し歩き、ようやくたどり着いたのが諏訪教会だったのです。歴史を積み重ねた木造の建物、そこに神様がたたずんでいるかのような静かな雰囲気に包まれた中で、稲池さんは次のように感じたと言います。「教会に入った途端、止めどなく涙があふれ号泣しました。気が付くと、のどにつかえていたものがすっと取れたような安らぎを覚

えたんです」。それを切っ掛けに稲池さんは、幼いころから何十年の時を隔てて再び教会にお参りするようになったのです。

「『何のために教会にお参りするのか』と聞かれたら、『鎧を脱ぐ場所、裸になれる場所だから』だと答えます。ただそこに居るだけで安らぎを覚え、満たされていく場所。それが教会なんです」

そう語る稲池さんは、サラリーマン時代をしみじみと振り返ってくれました。

大手のアパレル会社に勤め、花形の部署である商品企画を担当。「世の中の流行りは俺が作っている」とさえ感じ、銀座のクラブのどこにでも顔が利く生活。仕事の評価が出世につながるので、とにかく必死で働き、部下をどなり散らす日々。当時はがむしゃらにサラリーマン戦士として戦っていたそうです。

稲池さんは苦笑いしながら、「『男は外に出れば七人の敵がいる』という言葉がありますが、まさに他社や社内のライバルと戦うために全身を鎧で固めたような姿でした」と打ち明けます。

結果的に社内の派閥争いに敗れ、脇に追いやられたことが、五十歳での退職、夢のペンション経営へとつながっていくのですが、稲池さんは、「私の転機は六十歳です」と声を大きくします。父親の二十五年の御霊祭りをしてほしいという母の願いから金光教諏訪教会にご縁を頂いた五年前の六十歳。

とても厳しかったという父を思い出したのか、少し目を潤ませ稲池さんは言葉を紡ぎます。

「思えば、父親を反面教師のように生きてきた自分が、今こうして経済的にも順調に商売を続けさせてもらっている、食べることが出来ているのは、全て父や母が教会で祈り続けてくれたからであり、全てのことが線路の上を歩ませてもらっているような安心感を覚えるのです」

導かれるように「安心」という大きな財産を授かった稲池さんは、「イラチであった自分がつい最近宣言したことがある」と少しだけ笑みを浮かべます。

それは「怒らない」という宣言。サラリーマン時代、思いを伝えたくて怒っていたのですが、部下にとっては怒られたという事実しか覚えていないことが多かったそうです。その経験から、「怒らない」ようにしたとのこと。

「疲れないですか？」と問い掛けると、「楽！楽！だって神様が働いてくれて、怒りの感情を押さえてくれるんだから」と笑います。

最後にペンション「白樺倶楽部」の未来像を語ってくれました。「これからは、来てもらう方々の世代と世代をつないでいくようなペンションにしたいんです」。その表情は、怒りを忘れ、焦りもなく、全てを包み込むような安らぎに満ちたものでした。

《信者さんのおはなし》

「ありがたいをつくるもの」

ここは、三重県亀山市にある関（せき）という町。鈴鹿山脈のふもと、江戸時代からほとんど変わらない古い木造の家が続く街並みが、昔、宿場町として栄えた歴史を感じさせてくれます。

そのような町にある金光教関教会へお参りされている田中秀子さん。「金光教と出合い、信心をすることで七十歳を超えた今も、ありがたいという気持ちが年ごとに増えています」と、とても優しそうな笑顔でお話をされます。

子どもの頃から信心に熱心な母親に手を引かれ、教会にお参りに行っていた秀子さん。ですが、実は、信心するとはどういうことなのかよく分からないまま、ただ母親に付いていくだけだったそうです。そんな秀子さんが、本当に自分から教会にお参りするようになったのは、ある出来事が切っ掛けでした。

結婚をして、二人の子どもに恵まれ、その子どもたちが小学校に上がる前のこと。

秀子さんは原因不明の高熱に見舞われ、一カ月以上も入院生活を送りました。一カ月経っても原因は分からず、熱も下がりません。そんな中でも子どもの食事や生活のことが心配でたまらなかった秀子さんは、「このまま入院して寝ているわけにはいかない！」と解熱剤をもらい、熱が下がるとすぐに退院させてもらったのでした。

それから五年ほどが経ちました。子どもが小

学校に入ってからは仕事を始め、さらに忙しい日々を過ごしていたのですが、職場で受けた健康診断で、「心臓の形がおかしい」という結果が出たのです。すぐに大学病院で検査を受けたところ、前に高熱が続いたことが原因で、心臓の中にある血液の流れを調節する弁がうまく働かず、そのために血液が本来の流れから逆流してしまう「僧房弁閉鎖不全症」という病気になっていることが分かりました。すぐに症状が悪くなる病気ではありませんが、放っておくと心不全にもつながります。そのため、お医者さんからは、「早く心臓の手術をしましょう。状況が悪ければ、人工の弁に換える手術も必要です」と言われました。

けれども、子どもたちは小学生。まだまだ手が掛かります。「心臓の手術をするとなると、長い期間入院しなければいけない。その間、子どものことはどうすればいいんだろう」と思うと心配になり、なかなか手術に踏み切ることが出来ませんでした。

そうしてお医者さんに何度も無理を言って、秀子さんは十年くらい、手術を先延ばしにしてきました。けれども、そのうちに、肺に水がたまるようになり、四十七歳の時、お医者さんから、「もうここまでです。これ以上は待てません。家族を呼んで下さい」とまで言われてしまい、ついに手術を受けることになったのです。

秀子さんが母親に手術のことを伝えると、大変驚いて、すぐに秀子さんを教会に連れていってくれました。

秀子さんは母親と二人で先生の居る神前近くまで進み、手術を受けなければならなくなったことをお話しました。

今まではお参りに行っても、先生と母親の話を側で聞くだけだった秀子さんですが、この時、初めて自分で、「子どものことが心配だから、手術がうまくいき、出来るだけ早く退院出来るようにならせてほしい」と願いました。

教会の先生は、「手術が無事に終わるよう、神様にお願いさせてもらうから」と言われ、その場で一生懸命にお願いをしてくれました。そして、神様の恵みの象徴である「ご神米」というお米を包み紙にどっさり乗せて、秀子さんに手渡したのでした。秀子さんはこの時、不安になっていた自分をぐっと後押ししてくれたような気がして、とても心強く、ありがたく感じたそうです。

秀子さんはそのご神米を、ご飯を炊く時に少しずつ混ぜて、頂きました。手術が近付くにつれて不安が大きくなってくるのですが、そのご飯を食べていると、先生が一生懸命お願いしてくれたことが思い出されました。すると秀子さん自身も、「無事に手術が終わりますように。早く家に帰ってくることが出来ますように」と心の中で神様に願うことが出来、安心することが出来るのでした。

そうして迎えた手術は驚くほど無事に終わり、心配していた入院の期間も一カ月ほどと、思っていた以上に短くて済みました。また、一般的には十年後に再手術することが多いと聞い

ていましたが、ありがたいことに秀子さんは今も薬を飲むだけで済んでいます。

そして、この時のことが切っ掛けで、心から祈ることの大切さを知り、教会へお参りすることが増えていったのだと言います。

手術から二十年以上経ち、七十歳を超した今、腰が曲がり、足も思い通りに動かず、自分の体に老いを感じるようになりました。心臓は時々動悸（どうき）がして、なかなか寝付けない時もあります。そんな時、秀子さんは静かに手を合わせ、「この心臓が動いてくれているから私は生きてこられたのだ」と感謝をし、「このまま元気に動かせて下さい」と神様に祈るようにしています。

そうやって願って安心出来る神様に出合ったからでしょうか。秀子さんは笑顔で言います。

「体は老いていくのだけれど、その体にお礼を申していると、逆に年々ありがたい気持ちになってくるんです」と。

《信者さんのおはなし》

「二度とあんなことは言わない」

皆さんには、どうにもならない困難さを抱えた時、ありのままを打ち明けられる場所がありますか。今日は、そんな場所に導かれ、生きる支えとなる、しなやかな強さを自分のものにした方のことをお話しします。

タオルの製造や造船業が盛んな愛媛県今治市。しまなみ海道の四国側の出発地としてもにぎわうこの街で暮らす松本將人（まさと）さんは、愛媛県生まれの四十六歳。奥さんと二人のお子さんの四人家族です。大学で排水処理について学び、料理のたれなどを製造する食品メーカーに就職、今もそこに勤めています。

初めの何年かは、商品管理の仕事をしていましたが、やがて工場の排水処理などを担当するようになりました。大学で学んだことが生かせる職場です。電気工事の資格を取るなど、充実した毎日。奥さんと知り合い、結婚したのもこの頃です。仕事も、プライベートも言うことなし。何もかも順調だったのに、その頃は、「面白くない」と、よく口にしていたそうです。

そんな松本さんに、大きな変化が訪れます。三十五歳になる頃のことでした。一つは、長男の誕生。結婚して三年で初めての子どもを授かりました。もう一つは、工場の機械や設備を修理したり製作したりする部署への異動でした。そこで待ち受けていたのは、機械に関する未経験の仕事と、物腰は穏やかだけれど、仕事には

非常に厳しい上司だったのです。
上司は、知識も技術も素晴らしいものを持った人であるだけに、配属されたばかりの松本さんにも、高い水準の結果を求めたのかもしれません。
松本さんは、次々と仕事を与えられますが、知恵を絞って取り組んでも、足りない点を、厳しく追及されるばかりです。上司の期待に応えようと頑張りますが認めてもらえず、仕事は前に進みません。「上司の指摘はやっぱり正しい。明日こそは…」と、毎晩気持ちを立て直し、次の日も出勤するのですが、なかなか、「よし」と言ってもらえないのでした。
半年も経つと、すっかり自信を失ってしまい、「技量の乏しい私には出来ない」「私が悪い」と、自分を責める思いばかりが湧いてきます。気持ちは塞がり、朝、通勤のバイクにまたがると手は震え、じっとりと脂汗がにじむまでになってしまいました。そして、ある日とうとう、捨て鉢になった松本さんは、「もうここには居られない」と、工場長に直接訴えたのでした。
「今日のところは帰りなさい」と工場長から告げられた後、気が付くとなぜか、導かれるように金光教今治教会に向けてバイクを走らせていました。
実は、松本さんは、幼い頃から両親と金光教の教会に参拝しており、中学高校の頃には、部活の試合や試験の時に、「いい結果が出ますように」と、教会の先生に電話を掛けて神様にお願いしていました。けれども、大学生になると、

神様に縋ることは、「自分は弱い」と認めているような気がして、教会から遠ざかっていたのです。

導かれるように訪れた教会では、仕事のこと、体のことなど、ありのままを教会の先生に打ち明けることが出来ました。「随分長い時間をかけ、事細かに話を聞いてもらって、すっきりしたんです」と、松本さんは振り返ります。先生は、「大丈夫。おかげを頂けるから」と言って受け止めて下さいました。

それからは、出勤前に必ず教会に電話をし、「昨日はミスをしたので、今日は失敗がありませんようお願いします」「昨日は順調でした。ありがとうございます。今日もよろしくお願いします」と、毎日神様にお願いしてから、会社に向かうようになりました。折に触れて教会にも足を運び、少しずつ失っていた自信を取り戻していきました。

会社では部署替えがかない、上司とは離れて製造現場の主任となったことで、手の震えなど身体の不調はなくなりました。ただ、生産の手順は複雑で、間違えれば、無駄が出てしまいます。部下も抱えており、以前とは別の難しさがありました。

けれども、もう以前の松本さんではありません。つらくても、願いを受け止めて下さる神様が支えになりました。

つらい時こそ、「金光様、金光様…」と唱えて願う。夜寝る時には、「今日も何とか終わりました。ありがとうございました」というお礼

の祈りを込める。朝起きたら、「今日のいのちを頂き、ありがとうございます」というお礼の祈りを込める。そんなふうにして、その日、その日を大切に刻んでいるうちに、二人目の子どもを授かり、「大丈夫。おかげを頂けるから」という確かな思いが、松本さんの心に生まれてきたのでした。

やがて、製造現場での仕事が二年になろうとする頃、新しい部署が設けられ、松本さんは、得意だった排水処理施設の運転管理をすることになりました。機械設備が専門の、厳しかったあの人が上司でしたが、「大丈夫。おかげを頂けるから」という確信が、自信としなやかな強さを松本さんに与え、良い間柄となっていきました。

結婚当初、あんなに順調だったのに、「面白くない」が口癖だった松本さん。今、家族もみんな幸せで、やり甲斐をもって仕事に打ち込んでいます。そして、こう話します。「しんどいことはしんどい。でも、しんどいくらいの方がいいんです」と。神様に向かうことで、しなやかな強さを得た松本さんの、力強い言葉です。

どん底の時も妻が黙って見守ってくれていたこと、上司のおかげで仕事の力がついたこと…。実は、いつも恵まれ通していたことに気付いた松本さんは誓うのです。「二度と『面白くない』なんて言わない」と。

《信者さんのおはなし》

「無神論者の夫が…」

澄み渡った青空に雄大な日本アルプス。忙しい日常を忘れさせてくれる信州の大自然の中で、長野県・金光教松本教会に参拝されている佐藤文子（ふみこ）さんにお会いしました。

七十一歳とは思えぬほど美しくパワフルで、りんとした真っ直ぐな視線で話される生き生きとした女性です。

文子さんは、毎日俳句会の指導に出掛け、現在二百人ほどのお弟子さんがいるそうです。また、エッセイ集を出版したり、タウン誌にインタビューの記事を書いておられます。

文子さんの生まれは九州で、自宅には大きな神棚があり、両親は熱心に金光教の信心をされていました。文子さんも三日に一度は教会にお参りしていたそうです。

まだ小さい頃のことです。家は材木屋でしたが、お父さんは商売があまり上手ではなかったらしく、だまされることもあって、倒産してしまいました。借金取りが自宅に押し寄せ、一夜にして全てを失ってしまったのです。夜逃げするつもりでしたが、教会の先生にかくまってもらうことが出来ました。

しばらくして、ある信者さんが自分の経営する鉄工所の一角を貸して下さり、材木屋を再開。徐々に立ち直っていきました。最大の窮地を、教会と信者さんに助けてもらった両親は、より一層信心に励みました。

文子さんが高校三年の時、大学に行くお金が家にあるのか心配して両親に尋ねると、「お金は一夜にして無くなることがある。でも、身に付けた教養や学歴は一生付いて回る。勉強したいなら、学費は心配しなくていい」。そう言ってくれました。文子さんは、このことを振り返って言います。「朝晩、自宅の神棚に手を合わせ、祈ってくれていた両親の姿が目に焼き付いています」

さて、大学を卒業した文子さんはその後、縁あって今のご主人と出会い、意気投合。結婚し、しばらくは東京暮らしでした。ご主人は金光教のことは全く知らず、「君が信心するのはいいけど俺は無神論者。信心はしない」と言われました。

結婚してから数年後、ご主人は、生まれ故郷の松本市で通信関係の会社を立ち上げました。文子さんはご主人の仕事がうまくいくように逐一、九州の先生に電話で報告やお願いをしていました。その後、松本でも教会を探し当て、文子さんのお参りが再び始まります。しかしご主人は、「お参りする気はさらさらない。俺は無神論者だ」と言うので強要することはしませんでした。

ところが、順調に業績を伸ばしていたご主人の会社に不穏な動きが見られます。社長の席を追い出されそうになってきたのです。人間関係が悪くなり、ご主人は悩みました。

文子さんはそんなご主人を経済的にも支えるため、学習塾を開いたり、また、俳句や執筆を

始め、新聞社に投稿すると、原稿依頼が来るようになりました。全てご主人のためでした。しかしご主人の目には、自分がこんなに苦しい時に、妻は好きなことをして遊んでいる、としか映らなかったようです。

会社でどんどん窮地に追い込まれたご主人は、人間不信に陥り、お酒に溺れました。ついに文子さんに当たるようになり、家に居られなくなってしまいます。文子さんは、当てもなく街の中を歩いたり、車で山の中に逃げ、寒さに震えながら一晩を過ごしたり、遺書を書いたこともあったそうです。でも、ぎりぎりのところで両親の信心を思い出し、「ゼロになることは怖くない。必ず神様が助けて下さり、夫婦関係も良くなる」と信じていました。

文子さんがそう思い直したころ、ご主人が松本教会にお参りしたことを知りました。文子さんが教会を訪ねた時、先生から、「この前、ご主人がお参りされましたよ」と聞かされたのです。

びっくりして家に帰り、ご主人に確認すると、実は夫婦の仲を良くしたい思いで教会を訪ねたのですが、思わず会社でのことを全て吐き出してきたと言うのです。

ご主人は、「俺を騙そうとする奴が憎くて仕方がない」と先生に訴えたそうです。すると先生は、「あんたも助からなければならないけど、その人も助からないといけないんだよ」と言われたそうです。その言葉でご主人は目が覚めたと言います。「俺は今まで、自分が助かること

ばかり考えていた。そいつのことを責める心ばかりで、そいつが助かることは考えていなかった」

ご主人の心はその日を境に一変しました。あれほど憎かった人が憎くなくなったのです。それどころか、助かりを願うようになったのです。すると、不思議なことが起きました。憎かった人の行動が変わってきたのです。それから全てが良い方向に動き出しました。

あれから二十数年、ご主人は今も社長として、業界でもトップクラスの業績を上げています。

あの日、教会の先生と話してから、ご主人は何をするにも神様にお願いしてからするようになりました。そして、文子さんの知らない間に、岡山にある金光教本部へも参拝していました。

「境内を歩いていると気持ちが静まるよ」と優しく話してくれます。自宅に金光教の神棚も調えました。

今は毎朝五時に起き、自宅の仏壇でお経を唱えた後、神棚に手を合わせ、「今日はこういう仕事をさせて頂きます。万事うまくいきますようにお願い致します」と、声に出して拝んでおられるそうです。

若い頃、「俺は無神論者だ！」と何度も豪語していたご主人は、今や、文子さんよりも信心深い人になりました。「それが私にとって何よりもうれしいおかげです」、そう語る文子さんの穏やかな笑顔が印象的でした。

《信者さんのおはなし》

「神様がつけてくださった道」

長崎は坂の街。大通りも裏路地も、坂道を上っては山へ続き、下っては港へつながります。ですから、地元の人は、道を尋ねられると、「そこの角を右に上がって」というふうに案内します。

この長崎市にお住まいの高塚汎（ひろむ）さんは、昭和二十一年生まれの七十一歳。「信心しているのだから楽しく生きなきゃね。神様が見て下さっているんだから」。こんなふうに明るく話す、とても快活な方です。

実は、高塚さんは八年ほど前に病気で大きな手術を受け、胃を切除しています。今も、治療は続いています。でも、高塚さんの立ち居振る舞いは、みじんもそんなことを感じさせません。病気のことを話す時の口振りも、まるで、昨日のお天気のことを話題にするかのようで、何の気負いもありません。

「『信心しているのに、どうしてこんな病気に…』って言う人もいるけど、私自身は信心で受け止めているんです」。こう語る高塚さんには、無理に元気に振る舞うのでもなく、妙に悟り切ったというのでもない、自然でしなやかな力強さを感じさせる何かがありました。

そんな高塚さんと金光教との出合いは、物心付く前にまでさかのぼります。祖母が、生まれたばかりの高塚さんを、毎日のように、近くの教会へ連れて行ったのです。祖母にとって、教

会は心安らぐ場所だったようで、子守りがてらに通っていたと言います。

祖母は高塚さんが小学校一年生の時に亡くなりますが、その時までには、母親がお参りするようになり、続いて父親も。そして、家族そろって毎日、教会へお参りするようになっていました。

教会の先生から信心の話を聞くようになった父親が、こんなことをよく言っていました。「食べることが出来て、眠る所があって、毎日無事に過ごすことが出来る。これは神様のおかげ。こんなありがたいことはない」。この言葉は、若いころの高塚さんには、何か負け惜しみのようにしか聞こえませんでした。「生活も楽ではないし、特にいいことがあったわけでもないのに、おかげなんて」。そんなふうに思っていたと振り返ります。

でも、その頃の父親の思いが、今となってはよく分かります。「生きているのがおかげ」。だから、父親は、神様にお礼を言いたくて、毎日教会にお参りせずにはいられなかったのだと。

さて、高塚さんは大学を卒業して、長崎にある国内有数の大型機械メーカーに就職します。昭和四十六年のことでした。二十九歳の時には、抜擢されて、最先端の技術を学びにアメリカへ渡りました。それ以来、定年まで、中東や南米など海外勤務も数多く、国内でもたくさんの大きなプロジェクトに携わってきました。仕事を通して、社会に貢献してきたという自負もあり

ます。

と言うと、順風満帆、日の当たる表街道をひた走ってきたサラリーマン人生のように思われるかもしれません。でも、実は、紆余曲折の連続だったのです。いきなり畑違いの業務を任されたり、気難しい上司に悩まされたり、言葉は良くないですが、尻拭いのような仕事を押し付けられたり、冷や飯を食わされたり。転勤や配置換えはサラリーマンの常。業務命令とあれば、仕事の選り好みなどしていられないのはどこでも同じかもしれません。

そんな中、高塚さんは、事ある度に、教会にお参りしては先生に相談し、神様に祈って、仕事に取り組んできました。自分ばかりややこしい業務を当てられる、問題のある職場に回される、そんなもやもやした思いで心が塞ぎそうになった時、「何事も、神様からのお差し向けだからね」。先生のこんな言葉で、気持ちが楽になったと言います。

「お差し向け」、つまり、神様がわざわざ、この仕事を、この職場を、私に与えて下さったのだ。ならば、たとえ意に添わぬもの、厄介なことであっても、これは、神様が私に命じておられるのだ。神様が見守って下さっているのだ。そんなふうに思いを変えることが出来たのです。

とにかく神様に心を向けて、会社のため、人のために役に立つことが出来るよう願いを込めて取り組む。すると、その嫌だと思っていた仕事が、次のステップにつながっていく。そんな

経験を積み重ねてきました。

そういえば、高塚さんが中学生の時に、教会の先生から、「小さい時からずっとお参りしていたあなたのことを、神様はいつも見守っておられるよ。後でおかげにして下さるよ」と、よく言われていたそうです。今になって、その言葉の意味がよく分かります。

「二十年、三十年の先まで見据えて、神様が道を付けて下さっているとしか思えない」。このように高塚さんは話します。

その時には分からなかったけれども、振り向いて見渡した時に、ここまで歩んできた跡が、一筋につながって見える。それこそ、神様が先回りして、ここへ至るまでの道をあらかじめ付けて下さっていたかのように。

高塚さんは、今は奥さんと二人住まい。娘夫婦も同じ長崎市内に暮らしています。孫を四人授かったことも大きな喜びです。

かつて高塚さんが進学する時、父親が、「財産は無いが、信心だけは残してやれる。これだけは手放してはいけない」と言ってくれたそうです。そのことに感謝するとともに、今度は、自分が同じ思いで、子どもや孫たちに、大切なものを伝えていきたい、高塚さんは、今、そう願っています。

《信者さんのおはなし》

「笑顔のわけ」

長崎市の鶴港（つるのみなと）教会に参拝する釜坂津代美（かまさかつよみ）さん七十九歳は、下半身にまひのあるご主人と、何をするのもどこへ行くのも一緒で、お世話の出来ることを幸せと感じている笑顔の絶えないご婦人です。

津代美さんと金光教との出合いは、子どもの時です。お父さんが小さな漁船で仕事をしていたため、安全を願って、お母さんと一緒にお参りをするようになりました。

二十二歳の時、友人の紹介で、鉄骨の溶接の仕事をしている一歳年下のご主人と結婚しました。二人の娘にも恵まれ、家事に、子育てにと充実した日々を送っていました。

ところが、結婚生活四年目となる昭和三十九年のある朝、ご主人が、「今日は残業で遅くなるから」と出掛けた日、とんでもないことが起こります。

その日の現場は、建設途中の三階建ての工場でした。ご主人は足場の上で、仕事を始めてまだ三日目の新人を待っていました。新人が、「怖くて上がれません」と言うので、ご主人は溶接の工具を持ったまま、迎えに降りようとしたところ、手が滑って三階の高さから転落し、地面にあったブロックの上にたたき付けられてしまったのです。

すぐさま病院に運ばれましたが、意識不明の重体。その事故は、新聞やラジオでも報道され、

津代美さんは、たまたまラジオを聞いていた人からご主人のことを知らされたのでした。

津代美さんは、すぐに病院に駆け付けました。命が危ぶまれるほどの大事故でしたが、一命を取り留めることが出来ました。その後、意識も回復しました。しかし、下半身の神経が切れていて、お医者さんからは、「今後、立つことも歩くことも出来ません」と言われたのです。

教会の先生は事故のことを知ってからずっと神様に回復を願って下さっていました。津代美さんがお参りすると、「あなたも大変だろうけど、辛抱しなさい。大きなおかげを頂くから…」と言われ、神様にお願いしながらの入院生活が始まったのです。

津代美さんの生活は一変しました。事故の労災保険が認められたものの、それだけで家族四人が生活出来るわけではありません。津代美さんは仕事を始めたのですが、仕事に行き、子育てをして、毎日病院へ通うというのは、大変なことです。

やむを得ず、仕事を辞めたいと会社に申し出たところ、状況を理解してくれた上司が、半日だけの仕事の日を作るなどの配慮をしてくれ、何とか仕事を続けることが出来ました。

そのような生活が九年続きました。ご主人は長い入院生活のため、床擦れがひどく、化膿(かのう)してしまいました。

そんな時、タクシーの運転手をしている方との出会いがありました。運転手さんは、熊本に床擦れの専門病院があることを教えて下さり、

車の免許を持たない津代美さんに代わって、ご主人を熊本まで連れて行き、入院させてくれました。おかげでひどかった床擦れも治り、退院する時にはちょうど、以前から申し込んであったバリアフリーの市営アパートに入居出来ることにもなりました。

長い入院生活を終え、自宅に帰れたご主人の表情はとても生き生きとしていて、津代美さんも、ようやく一緒に暮らせる喜びを感じるのでした。

結婚当初、神様に手を合わせることのなかったご主人でしたが、津代美さんが大変な生活の中でも、神様にお願いしながら明るく生きる姿を見て、いつしか神様を信じる気持ちが生まれていました。食事の前には、必ず神棚に手を合わせてくれるようになったのです。このことも津代美さんにとって、うれしいことでした。

ご主人が四十歳になった時、「自分も何か役に立ちたい」と、車の免許を取ってくれました。津代美さんを、両手だけで運転出来る車に乗せて職場へ送り迎えし、帰りには教会へお参りします。教会に着くと津代美さんは、歩くことの出来ないご主人を背負い、二階にあるご神前へ向かって、階段を一段ずつ、「金光様、金光様」とお願いしながら、はって上がるのです。成人男性を背負うのは大変なことですが、津代美さんは、一緒にお参り出来ることがうれしいのです。

運転だけではなく、ご主人は、「みんなと少しでも同じ生活がしたい」と、五十歳を過ぎて

から車椅子バドミントンを始めるようにもなりました。

一家の大黒柱であるご主人が事故に遭い、それからの生活は大変なことの連続だったと思えるのですが、津代美さんの表情からはつらい苦労を重ねてきたようには見えません。

職場での配慮を頂けたこと、親切なタクシーの運転手さんに出会えたこと、床擦れ専門病院の退院に合わせて、バリアフリーの家に入居出来たこと。そうした一つひとつに、神様から守られているという実感があるからでしょう。津代美さんは事故のことを振り返って、こう言われます。

「神様に守って頂いている中で起きたことなので、事故はこの程度で済ませて頂いたんです。大難を小難に変えてもらったんですよ。全部、神様に守って頂いている中で起きたことなんです」

神様へのお礼の気持ちを喜びで表し、お世話になった方や物に感謝しつつ、今では津代美さんもバドミントンを始め、毎日を楽しく過ごされています。事故の時に、先生から言われた「大きなおかげ」という言葉がその笑顔に現れているのでしょう。

《先生のおはなし》

「真夜中の電話」

ルルルルルル。寝静まった夜中に掛かってくる電話。一般家庭なら、めったにないのかもしれませんが、教会という所には時折、急を知らせる電話が掛かってきます。

「突然、具合が悪くなったので、今から病院に行きます。心配なので、神様にご祈念をして下さい」とか、長らく病気で寝ていた人が、「今、亡くなりました。お葬式をお願いします」という知らせも入ってきます。

また、心を病んだ人が、「寂しくて仕方がない。話を聞いて欲しい」ということも度々です。中には、「今から死にます。先生、長い間ありがとうございました」などという緊迫した状態での電話もありました。いつまで経っても夜中の電話は苦手です。

でも、その日の夜中の電話はうれしい電話でした。呼び出し音が鳴り出した途端、「来た来た！」と電話口にいそいそと飛んでいきました。

克也君という青年のところに初めての赤ちゃんが生まれる予定なのです。克也君は金光教の信心をしている家庭で育ちましたが、若い子にありがちの、「信心なんて少しカッコ悪い」くらいに考えているようにも見受けられました。それでも、金光教の教会で結婚式を挙げ、懐妊してからは、検診のたびに奥さんのなっちゃんと二人でお参りに来ていました。そんな克也君に私は、「どんなに夜中でもいいから、生まれ

たら知らせてね」と言ってあったのでした。

「今、生まれました。女の子でした」

うれしそうな、弾んだ声です。「おめでとう。神様にお礼するね」と言って、電話を切りました。予定日を一週間も過ぎていて、今日、生まれなかったら、明日は入院して陣痛促進剤を用いるということになっていたので、自然に陣痛が来たこともありがたいことでした。

私はご神前に行き、無事に生まれたこと、そして、願った通りの自然分娩、立ち会い出産が出来たことを神様にお礼申し上げて、さぁ眠ろう、朝になったら赤ちゃんに会いに行こうかな、と思いながら再び布団に入りました。

しばらくして、またまたルルルルと電話が鳴りました。

「なっちゃんの様子がおかしい！」。悲鳴にも似た克也君の声です。つい今しがた、あんなにうれしそうな電話を掛けてきたのに、今度は産後の急変を告げる電話でした。「出血がひどくて、血圧が四十に下がって…」。それ以上は声になりません。「分かった。とにかく神様にお願いするから」と電話を切って、私はまたご神前に行き、神様に事の次第を申し上げ、「どうぞ、なっちゃんを助けて下さい」と必死に祈りました。

そこにまた、電話が鳴りました。受話器を取るのが怖い一瞬でした。克也君が泣いています。恐る恐る尋ねました。「どうなの？」「分からない。僕は病室から出されて何も分からない。怖くて怖くて仕方がない」と言います。その時、

「大丈夫。大丈夫だからね。ここで神様にお願いしているから絶対大丈夫。あなたもそこでしっかり神様にお願いしなさい」。私は自分でも驚くほどきっぱりと、「大丈夫」という言葉を口にしていました。私自身、「もしものことがあったらどうしよう？」と怖くて仕方がないのに、自分の口から、「神様にお願いしているから大丈夫」という言葉が出た時、本当にきっと大丈夫、という思いに包まれました。

あれほどずっと、神様に心を向けて無事の出産を願ってきた二人です。絶対に大丈夫。祈りながら、私の中には、これは神様の大きなおぼしめしがあってのことだ、という確信が生まれていました。

神様に祈り続ける中、二時間ほど過ぎて、少しずつ空が明るんできた頃、再び、電話が鳴りました。克也君のお礼の電話でした。なっちゃんは子宮弛緩（しかん）という病名で、出産後の子宮の戻りが悪く、突然大出血を起こしたのだそうです。最初の病院には輸血の準備がなかったので、大きな病院に救急車で搬送され、そこで大量の輸血が始まり、ひとまず、なっちゃんの危険な状態は山を越えたこと。そして、「このまま子宮の回復が出来なければ子宮を摘出することになるけれど、それはもう構わない」と克也君は言いました。

そのきっぱりとした口調には、なっちゃんと赤ちゃんを守っていこうという克也君の父親としての決意が感じられました。私はほっとした思いと、神様、ありがとうございました、とい

う思いで、「良かったね、良かったね」と返事をするのが精いっぱいでした。

昔は、こんな場合にはたくさんのお母さんたちが命を落としてきたのだそうです。今は医学が進歩して、随分危険は減ったようにみえますが、それでも、お母さんたちは本当に命を懸けて出産に臨むのだと、改めて思わされました。

昼になって、なっちゃんの子宮はみるみる回復し、お医者様が、「次の子どもも産めますよ」と言って下さったという、うれしい報告を持って克也君は参拝して来ました。振り返ればたった一晩のうちの、それはそれは大きな出来事でした。

その後は、驚くほど順調に回復し、一週間ほどして退院の御礼に三人で参拝してきました。

わずか五時間ほどの間にあふれるほどの幸せと千切れんばかりの苦しみを味わった三人です。なっちゃんの腕の中で赤ちゃんがすやすや眠っています。

私はこう彼らに話し掛けました。

「おめでとう。あのね、私はあの時、『あなたたち夫婦二人に子育てをさせてやって下さい』って神様に願ったの。あなたたちも、赤ちゃんと一緒に親としての新しい命を頂いたんだよ、ホント良かったね」と。

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　0865-42-6453

FAX　0865-42-2114

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送	日曜日	あさ４時３０分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ５時２５分
朝　日　放　送	水曜日	あさ４時５０分
ＲＫＢ毎日放送	日曜日	あさ６時５０分

こころで聴くおはなし　検索